言語社会研究科　博士審査要旨

論 文 提 出 者　　阿部　幹雄
論　文　題　目　　中国近代文学における「文学」をめぐる言説の系譜
　　―五四新文学、プロレタリア文学、そして魯迅について―
論文審査委員　　坂井　洋史、松永　正義、坂内　德明

１．論文の構成

1910 年代後半、中国に近代文学が誕生してから約 10 年の間に、文学の形式、作家の思想の在り方から、読者層、テクストの流通、普及に至るまで、旧来とは全く様相を異にする文学状況が現出した。主として外国文学の影響下、様々なジャンルにおいて新しい文学作品、即ち「新文学」が生産された。それと共に、「文学」「新しい文学」とは何か、それらはどうあるべきかという根本的な問題、即ち「文学」を対象化し、メタ・レベルで「文学」を語ることも活発に行われ、「理論建設」という領域における焦点を形成した。

しかし、現実の急激な変化と連動しつつ、「文学」観念も短期間に大きく変貌を遂げる。新文学誕生時期の個性解放や自由、民主の希求、文学言語の変革（文語から口語へ）といった「文学革命」のモチーフは、20 年代半ば以降、国内統一と近代国家建設を目指す国民革命の高揚と挫折を背景に、「革命文学」が提唱されるようになると、たちまちのうちに反省、批判の対象となった。30 年代に向かって、革命文学は一層先鋭化してプロレタリア文学へと変貌していくが、そこでは革命文学すらも新文学言説から解放されていないものとして批判の対象となった。

従来の文学史記述においては、このような文学観念変革の動向は、マルクス主義文芸理論の観念的な理解、導入及び狭隘な党派観念によってもたらされたものと、否定的に評価されてきた。本論文は、むしろこれまで否定的な評価を与えられてきた諸言説を支える論理に密着し、その妥当性、必然性を内在的に読み取りつつ、それが近代文学そのものを超克すべき新たな可能性を内包した、全く新しい文学の提唱であったことを明らかにしようとする。また、魯迅の文学観、文学言語観についても考察し、そこに一般的には党派的対立関係にあったとされるプロレタリア文学者たちの文学観との共通点を見出すことで、従来の文学史記述とは一線を画す斬新な文学史像を提示しようとする。

本論文は A4 版、本文 81 頁（1 頁は 400 字詰め原稿用紙約 3.5 枚相当）、文末に一括された注釈 7 頁、主要参考文献表 8 頁、からなり、以下の各章各節から構成されている。

序章
第一章　「五四新文学」という言説空間
　第一節　初期における成仿吾の「文学観」の特徴
　第二節　「五四新文学」の「言説空間」

第三節　「文学観」を見直す契機
第二章　「革命文学論争」にみられる問題
第一節　なぜ「革命文学論争」に注目するか
第二節　「革命文学論争」研究について
第三節　「『文』と『語』の分裂」という事態
第四節　「白話文」における困難
第三章　中国近代文学における「プロレタリア文学」の画期性
第一節　李初梨のプロレタリア文学理論について
第二節　「革命文学」から「プロレタリア文学」へ
第三節　「文学」の対象化について
第四章　魯迅の言語観とその「抗い」
第一節　「『墳』の後に記す」に注目する理由
第二節　参考にする先行研究について
第三節　『墳』という作品における「『墳』の後に記す」の位置づけ
第四節　所謂「初期」魯迅における「言葉」について
第五節　「『墳』の後に記す」における「言葉」
第六節　批判的言説の変化
終章　まとめと今後の課題
注釈
主要参考文献表

２．本論文の概要

以下で各章毎の内容を要約する形で、本論文の概要を示す。

序章は著者の問題意識と本論文の設定した目標が示され、構成毎の内容が予告される。

第一章は主として、中国最初期の文学結社・創造社の初期中心メンバーであり、結社の理論的方向性を定めた批評家・成仿吾の文学観が検討される。

第一節では、成が文学を「芸術」という大きな概念で包括し、それを天才と呼ぶべき個人による「詩（的なもの）」の表現であるとして、芸術（文学）を人類的、普遍的な無上の価値として奉じていたが、そのような抽象的な語彙によって文学を思考する観念においては、文学、文化に刻印された差異や葛藤などは思考の対象にはならなかったと指摘される。

第二節では、前節で成仿吾について指摘された、普遍性、抽象性において文学を思考する傾向が、成一人の特質ではなく、実は五四新文学という言説空間を覆っていた一種の偏向であったと指摘される。ここでは周作人、鄭振鐸といった、「文学研究会」に属し、「人生のための文学」を標榜したために、一般的には「芸術至上主義」を唱える創造社・成仿吾とは対立関係にあったとされる文学者たちの議論が検討され、そこにも程度の差こそあれ、普遍性・抽象性のレベルで文学を理解する傾向が明らかであったと指摘される。そして、「五四運動とそれに伴う五四新文化

運動こそは『人』『人類』『恋愛』『社会』といった『抽象的』な言葉で現実世界を了解可能なものとみなす言説空間をうみだしたといえる」という見解が示される。

第三節では、五四退潮期と呼ばれる 1923 年頃になると、成仿吾が初期の抽象的、個人的な文学観を脱して、革命文学を提唱するに至った、移行段階の議論が検討される。成はそれまでの文学芸術を絶対化する発想から一転、文学芸術は本来相対的なものであり、批評家が求め得るのは相対的評価を下す際の客観的基準に過ぎないという議論を展開する。論者はこの転換の原因を、激しく転換する現実状況にあるとする。高揚する国民革命に身を投じた成は「革命文学」を提唱することになるが、しかし、その革命文学の主張を支える論理は、依然として革命文学の永遠性を希求するものであり、初期の天才による文学を語る際の論理と同じであったと論者は指摘する。

第二章は国民革命の挫折を契機に発生した「革命文学論戦」の再検討である。論者は、従来魯迅・茅盾ら中国の現実を深く見据えた「正確」な一方と、革命の挫折によって観念的に急進化した第三期創造社の「誤った」主張の間の争いと評価されてきたこの論争を、言語、言語主体の意識の変革を要請した、即ち新文学の抱えた問題に対して新たな文学の在り方を提示したものと考える。

第一、二節では革命文学論争に注目する理由が述べられ、先行研究が批判的に検討される。論者は、先述のような従来の論争評価の起点には馮雪峰の概括の影響が大きいと指摘、それは中国、日本の研究を束縛する前提となってきたとしながら、最近では党派的確執よりも同一陣営内部の差異に注目する研究が現れていることに注目し、自らも例えば李初梨らの議論の内部に懇切に分け入って、同じ創造社に属する郭沫若の文学観との違いを確認しようとする。

第三節、第四節では新文学誕生初期以来の文学観が、20 年代後半に至って批判、超克の対象となるに当たり、文学言語に対する関心が契機になったという見通しから、論者は成仿吾の「文学というこのイデオロギーの革命は常に免れえないが、この一切を解決する鍵は、『文』と『語』の対立関係に潜伏している」という 1928 年の議論に注目する。五四新文学以来の文学言語が、文語から口語へと変わったものの、それは一部の知識人が占有する特権的な言語であり、広汎な大衆には受け入れられないばかりか、そのような労働大衆を中心として進行する革命の現実を表現することもできないという状況に対して、より大衆の用いる口語に接近すべきであるとの主張がなされ、ここに「『文』と『語』の対立」という局面が発生したのである。論者は、このような意識は、創造社や太陽社に属する左翼文学者のみに特有のものではなく、彼らとは国民革命、革命文学に関して見解を異にし、一時は激しく論戦を交わした茅盾の議論にも見られる点に注目する。この時期、成仿吾らは「文」を否定し、大衆の用いる口語を文学言語に採用すれば、革命の現実を描くことができ、労農大衆と同じ立場に移行し得ると楽観していたのだが、茅盾は「『文』と『語』の対立」の存在を承認しつつ、社会的階層に由来する言語の差異なども視野に収め、文学言語の特殊性、複雑性についてより深い考察を巡らせていたと、論者は指摘し、茅盾が国民革命挫折の現実と自らの携わってきた文学、即ち新文学を総括する構えで著した「従牯嶺到東京」を中心にその文学言語観を分析する。

第三章は、前章で問題とされた「『文』と『語』の対立」という問題設定自体が、李初梨によって批判され、理論的には乗り越えられた、少なくとも乗り越える可能性が示されたことを明ら

かにする。

第一節では李初梨の文学観が、先行する議論との相違を中心に整理される。李が強調するのは、文学は即ち実践であるということ、文学者が階級意識を具えることによって、階級的観点からする現実の反映は可能になるのであり、客観的に外在する現実の存在を否定する。五四新文学以来の文学観にあっては、作者の外部に存在する現実を〈観照／表現〉することが文学の機能、使命であるとされてきたため、作者と現実を媒介する言語の限界がそのまま文学の限界になってきた、しかし李は作家の意識のプロレタリアート化によって、主客の対立、媒介物の限界などは全て問題にならなくなるとしたのであった。論者は、このような李の議論を、政治的には同一陣営に属する郭沫若や蒋光慈らの見解との相違の点検、恐らく李が基づいたであろう福本和夫の見解の参照を通じて検討する。

第二節、第三節では、新文学から革命文学へ、革命文学からプロレタリア文学へという過渡と転形は一応の決着を見たという見解が示される。論者は、李初梨ら若い世代の急進化の影響を受けて、自らの意識のプロレタリアート化に突き進んだ成仿吾の議論を検討した上で、更に李初梨の見解を中国近代文学観念におけるイデオロギー批判の最初の導入という角度から整理する。ルカーチから示唆を受けて導入された「物象化」概念が、李のイデオロギー批判の骨子であるが、この立場から例えば周作人の議論などが、既に乗り越えられた新文学言説として批判される例などが検討される。この段階に至って、文学は初期の成仿吾が想像したような特権的な存在であることを止め、イデオロギーの一分野として相対化されることになった、それは他でもない成仿吾の文学観が 10 年という時間を経て遂げた変化そのものに体現されていると論者はまとめる。

第四章は、これまでの展開からやや逸脱する態で、専ら魯迅の言語観が論じられる。

第一節では、本章が特に「『墳』の後に記す」という一文を採り上げる理由として、それが魯迅の言語観、文学観をよく窺わせるテクストであるとされる。第二節では先行研究として、木山英雄、汪暉の所論が検討され、そこから近代、近代性、近代文学に対する超克の可能性を示した魯迅という評価の姿勢を継承する旨言明される。第三節では、このテクストの特異性、それが多様なスタイルの、長年にわたって書かれたテクストを集めたものへの跋文であり、従って、それは魯迅の文学、文章、及びそれに関わる自らの姿勢などを回顧し、総括した性質を帯びていることが強調される。

第四節では初期魯迅の言語観が紹介され、第五節では、「『墳』の後に記す」に窺われる言語観、文に関わる姿勢に関する言及が仔細に点検され、魯迅にとって言語とは、自らを裏切り、読者をも裏切り続けるという意味で、常に不信の対象であったという見解が示される。第六節において論者は、そのような文学観、言語観は、日々の実践の中で感覚的に体得された近代文学批判ではあったが、実は李初梨らが到達したプロレタリア文学論、新文学／近代文学批判とも一脈を通ずるものであったという見解を示すと共に、それが 30 年代におけるメディアの多様化、社会の複雑化を背景に、より今日的な問題性を露わにしていったとの示唆も行っている。

終章は本論文のまとめと、今後の課題の表明である。ここでも、本論文で跡付けた文学観の変遷が、今日性を具えているとの見通しが繰り返し述べられている。

３．本論文の成果と問題点

本論文は、新たな文学史記述の可能性探求という作業の一環であると位置づけられよう。作家に内在する論理の追跡や、テクストの着実なリーディングに拠らず、外在的なイデオロギーの正統性を基準として記述された文学史の「硬直」は、中国本土においても 80 年代末から克服の対象として意識され、以降着実に実績を生んできた。本論を、国内外を問わず、大きくこの分野の学術研究の現勢図に配置してみれば、本土の先端的な問題関心を共有し、新たな文学史記述を実現するために着実な貢献をなしたものと評価できる。具体的には、革命文学、プロレタリア文学の提唱者である成仿吾、李初梨といった、従来は魯迅という圧倒的な「権威」によって批判されたがために、一貫して観念的、セクト的といった批判を浴びせられ、その主張、論理の懇切な理解が「忌避」されてきた批評家の議論を冷静かつ丁寧に読み込み、そこから外在的な基準による「断罪」とは全く異なる、新たな問題（五四新文学、近代文学の超克／文学言語とイデオロギーの問題など）との繋がりを発見していることが、その成果として挙げられる。

次に本論文の特徴であり、また優れた点として指摘し得るのが、思弁的な分析態度と叙述のスタイルである。90 年代以前の中国現代文学研究は、前述のような「イデオロギー的硬直」の影響を長く被ってきたために、着実かつ冷静な検討、分析を行うべく、基本的な文献や資料が十分に活用できないという状況にあった。そのため研究の開始に当たっては基礎的な事実確認や資料整理などから着手しなければならなかった。このような状況は近 10 年来大幅に改善されており、仮説や見解、論証の独自性や有効性によって「研究」が評価される時代がようやく到来したように思われる。過去においては、イデオロギーによる束縛から相対的に自由であるという利点を活かした日本の中国現代文学研究は、その「資料重視」「実証」の姿勢が本土からも評価されてきたことは事実である。しかし、今日このような「利点」は殆ど失われつつあり、今後の研究姿勢についての一層の自覚化が求められているといえよう。本論文は、その密度に若干の不均衡こそあるものの、基本的に「読み・考える」という姿勢で一貫しており、その本土のアドバンテージであるリアリティに拮抗し得る抽象性の高さ、思索の深さを目指す方向性は正しいと思われる。この特徴は、特に第四章の魯迅を扱った部分において、適切な叙述と相俟って、一つのスタイルを形成しているであろう。

具体的に、本論文が提示した仮説、見解について見れば、第一に五四新文学の言説空間の抽象性、普遍信仰が、従来の文学史記述においては対立的な立場にあるとされてきた文学者にも共通して存在すると明確に指摘した点、第二にそのような新文学言説が対象化され、批判、検討、超克されていく過程を設定したこと、及びその過程が革命文学からプロレタリア文学への「発展」であったと明らかに筋道をつけた点、第三に文学言語の問題（「文」と「語」の対立）に注目し、五四新文学→革命文学→プロレタリア文学という変遷が、単に現実状況への対応、或いは社会変革を推進するイデオロギーからの要請にのみ起因するものではない、即ち外在的な要因にのみ因るものではなく、そもそも新文学に内在する問題が露呈し、それが外的要因と結びついて発生したという見通しを提示したこと、第四に魯迅の言語観の検討を通じて、新文学／近代文学が超克されていく過程もしくはその可能性が決して単一のものではなく、多様なアプローチがあり得ることを指摘し、全体の論旨、このような作業の蓄積の上に遠望される新たな文学史像をより立体

的にしている点、などが独創性を具えた部分として評価できよう。これらの仮説、見解は、これまでの研究における空白を補填するものであり、学術的な価値も高いものである。

しかし、本論文には問題点も少なからず存在する。

形式的な点について指摘すれば、先ず分量として如何にも薄手である。上述のように、本論文は思弁的な分析態度と叙述のスタイルを採るが、そのような性格の論考であっても、論旨を補強し、仮説を論証するに十分な材料の提示は不可欠であり、その点で本論文が周到であるとは言い難い。更に材料を提示すればこの分量で済むはずはなかったであろう。分量について更に指摘すれば、第一、三章は三節から成り、第二章は四節から成るが、第四章だけは六節から成っており、不均衡が露わである。第四章の第一～三節などはごく短いものであり、まとめるべきであった。

措辞、用語に学術論文に相応しからぬものが散見することも指摘されねばならない。思弁的な分析態度と叙述のスタイルとはいえ、エッセイ風であったり、厳密な定義を欠いた主観的な措辞、用語は慎むべきである。そのような状況と、端正かつ厳密な叙述が交互に現れるようで、全体の完成度を低めていると言わざるを得ない。また誤字・誤記が少量残っており、着実で冷静な推敲が更に必要だったと思われる。

叙述の中で、誰が何年の段階で発した議論であるか、明示されない部分が多く、読者を困惑させる点も問題である。比較的短い期間の変化を跡付ける作業としては、時間の推移が読者に明らかに印象づけられるスタイル、叙述、措辞に配慮する必要があったろう。同様の要求として、歴史的な変遷が問題になるのであれば、主要なテクスト、文壇上・社会上の事件を配列した年表が必要だったろう。

内容に関して言えば、第一に、全篇を一貫する筋・ストーリーの提示が明確でない点を指摘しなければならない。新文学言説が対象化され、批判、検討、超克されていく過程が、近代性批判、近代文学批判とどのような関係にあるのか、十分な考察と論述がなされていない点は大きな欠陥である。その結果、第四章の魯迅の言語観に関する考察が、全体の中で浮いてしまっているような印象を与える。それまでの成仿吾、李初梨の議論を中心に分析、検討されたのは、新文学言説が対象化されていく過程だが、魯迅を扱った章では、俄かに分析の中心が近代批判になっている。これは恐らく、本論文が既刊の三篇の論考を合体させて成ったという、テクストの成立事情に由来するものだろうが、一見異なる問題を扱っているように見える論考が、実は同じ問題関心に貫かれていることを明らかにするような接合の手間を惜しんだこと、つまり五四新文学と近代性の問題をより深く掘り下げて考察しなかったことは批判されねばならない。

第二に、各章の性格付けがやや混乱していることがある。これも元来独立した論考を合体させたという執筆経緯に関わる欠陥だろうが、成仿吾に関する記述が第三章まで断続的に現れ、焦点がぼやけている。第一章は成仿吾、第二章は茅盾、第三章は李初梨、第四章は魯迅という風に、作家別に章を立てるか、あくまで年代記的な秩序に拠るか、或いは問題別に章を立てるか、いずれかに徹する必要があったのではないか。いずれも一長一短あろうが、本論文の構成は読者に中途半端の感を抱かせる。

第三に、またもや前述の「接合」に関わる問題だが、それぞれ独立した論考として公刊された際には、紙幅の関係上、十分な材料を提示した上での周到な論証は技術的に困難だったと考えら

れるが、本論文の執筆に当たってそのような制限はないので、より広範な目配りをした上で、それを叙述に存分に反映すべきだったろう。成仿吾については、初期の「天才論」に関わるものとしてドイツ表現主義への傾倒や、中期に至り芸術の社会的意義を強調するようになる際にギュイヨーが与えた影響なども視野に収めねばならないが、それらを論じた先行研究が検討されていない。また周作人について「人的文学」一篇のみを取り上げて、そこに窺われる抽象的思考に注目、これを直ちに五四新文学言説の偏向に結びつけるのは性急に過ぎる。周作人には民族、文化、地方などとモダニティとの間で分裂している近代人についての思索があったはずである。これらは本論文の目配り不足を示す一例に過ぎない。

全体として、既刊の論考を合体させるに当たって、他の議論も参照して、これを補充することが接合作業の眼目の一つであると論者には意識されており、単純に既刊論文を並べたものとは異なり、構成にも工夫を凝らしたようだが、この作業は質、量共にいまだ不足である。その結果として、それぞれの文学者を専ら扱った論としては手薄であるし、一方、専ら「問題」を論じた考察として見ても、論の運びが性急であり、説得力に翳りを落としていることは否定できない。

４．結　論

本論文には欠点、問題点も少なからず存在するが、論者の標榜した研究姿勢、その方向性、及びここに提示された新たな文学史記述に向けた意欲と仮説は高く評価されるものであり、前述のような、本論文のテクストとしての完成度に関する遺憾を補って余りある。

以上の所見から、審査員一同は、本論文が独創性に富む優れた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに値する研究業績であると考えられる。

最終試験結果要旨

平成 22（2010）年 2 月 10 日

学位申請者　　阿部 幹雄
論 文 題 目　　中国近代文学における「文学」をめぐる言説の系譜
　　―五四新文学、プロレタリア文学、そして魯迅について―
論文審査委員　　坂井 洋史、松永 正義、坂内 徳明

平成 21（2010）年 2 月 9 日、学位申請論文提出者　阿部幹雄氏の論文および関連分野について、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文「中国近代文学における『文学』をめぐる言説の系譜―五四新文学、プロレタリア文学、そして魯迅について」に関する疑問点および関連分野について質疑を行い、説明と回答を求めたのに対して、阿部幹雄氏はいずれも適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、阿部幹雄氏が学位「博士（学術）」を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。

以　上